

森とともに生きて・吉野編

縄文・弥生の遺跡から

成瀬 匡章（川上村 森と水の源流館 学芸員）

大台ヶ原山に源を発し、紀伊水道へと注ぐ吉野川・紀の川。紀伊半島の中央から東西に流れる全長136kmの大河の流域には、縄文時代・弥生時代の遺跡が多数発見されています。



宮の平遺跡

みやのたいらいせき
宮の平遺跡

縄文時代・弥生時代の遺跡は、源流の川上村や東吉野村周辺でも多く見つかっています。特に川上村の宮の平遺跡は、大滝ダムの建設に伴う発掘調査が行われた結果、吉野山地での当時の暮らしを知る多くの手がかりが得られています。

宮の平遺跡からは、縄文時代早期（約

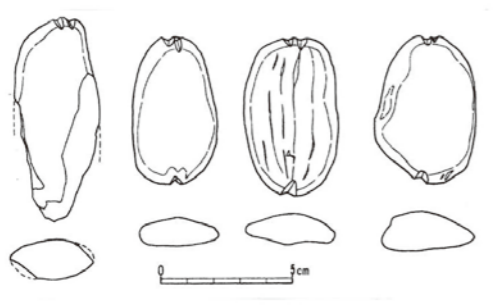
きりめせきすい
切目石錘

9000年前）から弥生時代後期（約1800年前）までの住居跡をはじめ、多くの土器や木の実を磨り潰す磨石や石皿などが発見されています。特に縄文時代中期末から後期初頭（約4000年前）には、石を使った祭りの場所（環状配石遺構）や「柄鏡形住居」と呼ばれる特殊な住居が作られました。これらは台高山地を挟んだ三重県側をはじめ、東日本で多数見つかっていますが、西日本では余り例がありません。

また、宮の平遺跡からは切目石錘という魚網の錘が数百点確認されています。それらを分類してみると、少し変わったタイプのものが混じっていました。通常の切目石錘は、小石の両端に1本ずつ切り込みが入っていますが、宮の平遺跡では2本以上の切り込みを入れたものが多く見られました。これは流れの速い上流で網を使う際に、錘が外れにくいようにしっかりと結びつけるための工夫と考えられています。この

ようなタイプのものは三重県側の櫛田川・宮川上流域の遺跡から見つかっています。

これらのことは、縄文時代と同じような信仰やライフスタイルを持った人たちが台高山地を越えて奈良県側と三重県側を往来していた可能性を示しています。今でこそ交通も容易ではない山間部ですが、台高山地には奈良県側と三重県側を結ぶ昔の峠道がいくつもあり、盛んに往来があったことを覚えておられる方もおられます。縄文時代の人たちもこのような峠道を使って往来していたのかもしれない。



片側に2本の切り込みがある切目石錘
(東吉野村 中出遺跡採集)



トチの実

現代に見る縄文時代からの繋がり

さて、弥生時代になると稲作が生業の中心となっていきますが、意外なことに稲作に向かないはずの吉野川の上流域でも弥生時代の遺跡が数多く見つかっています。

これまで吉野町の宮滝遺跡をはじめ、いくつかの弥生時代の遺跡が発掘調査されていますが、住居や墓の形、土器は弥生文化を取り入れています

が、稲作に使う道具はほとんど見つかっていません。代わりに木の実を磨り潰す磨石や石皿がたくさん見つかり、基本的な生活は縄文時代から変わっていないことを示しています。

現在でも、吉野の山間部ではトチの実を食べる食習慣が残っています。集落の周辺には村人に大切にされているトチの大木を見ることができ、秋にはたくさんトチの実が実ります。

そんなトチの大木を見てみると、吉野の山に生きる人たちのライフスタイル

ルが、縄文時代から現代へと途切れることなく繋がっていることを実感することができます。

参考文献

- 松田真一「吉野を縦横に走る縄文街道」『吉野仙境の歴史』文英堂 2004
- 川上洋一「吉野川流域の弥生時代」『吉野仙境の歴史』文英堂 2004
- 成瀬匡章・松田真一「東吉野村小栗栖採集の縄文時代遺物について」『青陵』109号 2002



トチ餅搗き：達っちゃんクラブin匠の聚